

中国語教育学会会報

第16号(通巻41号) 2005年12月14日発行

〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1

東京外国語大学中国語研究室内

中国語教育学会

郵便振替口座 00110-1-191152

目次

- (1) 「理事会」報告
- (2) 2005年度「例会」の記録(続)
- (3) 新規会員紹介その他
- (4) 「世界漢語大会」および「第八屆国際漢語教学討論会」参加報告……古川 裕
- (5) 「2005年高等学校中国語教育全国大会」について……篠田 俊彦

(1) 「理事会」報告

「2005年度中国語教育学会理事会」が開催されました。以下、議事録に基づいて討議された内容について簡単にご報告いたします(文責:中国語教育学会会長 依藤 醇)

・日時:2005年11月26日(土)16:00~18:00

・会場:日中学院302教室

・出席者(50音順):

佐藤富士雄 武信彰 陳文芷 中野貞弘 平井和之 三宅登之

守屋宏則 吉田隆司 依藤醇(以上理事)

石田友美 井田みずほ(以上幹事)

(敬称略)

・事務報告

最初に会長より、会員数・会費納入状況・活動状況(月例会)についての報告がなされた。その後、理事より寄せられた意見を含めたテーマについて議論が交わされた。

・討議事項

1. 顧問・名誉会員について
2. 役員選挙について
3. 学会誌について
4. 全国大会について
5. 夏期セミナー実施について
6. 理事からの意見について
 - (1) 学会名の英訳・中訳について
 - (2) 会誌掲載論文要旨のHP掲載について
 - (3) 桜美林大学シンポジウムについて
 - (4) 例会での発表内容について
 - (5) 2005年度全国大会でのパネルディスカッション実施について
 - (6) 孔子学院について

1. 顧問・名誉会員について

会長より、「日本中国語学会」「日本中国学会」の会則を参考資料としつつ、顧問と名誉会員について本学会の会則をどう定めるかが諮られた。顧問については会則には規定がないが、既に第2回大会の場で興水優氏を満場一致で顧問に選出している。早急に顧問についての規定が必要であることで一致した。名誉会員については、協議会発足時からの会員で70歳以上の会員と定めるのはどうかという意見も出されたが、協議会と学会とは一応別に考えるべきで、協議会発足時からの会員と定めるのは適当ではないという指摘があった。続いて、理事会において特別推薦された70歳以上の会員とするのはどうかという意見が出され、現時点ではそれが妥当な案ではないかということになった。

結論：顧問と名誉会員については、会則にその規定を明記する必要がある。今回の理事会の討議を踏まえて、事務局で会則改定案を準備し、2006年3月25日の会員総会（同日の理事会での決定を経た上で）に諮る。（なお、名誉会員については、本学会は歴史が浅い為、暫定措置として、理事会で特別推薦されたうえ大会時の会員総会で承認を得た70歳以上の会員とする。また、長期的には10年以上の会員であることを条件に加えることとしてはという意見があったことを補足しておく。）

2. 役員選挙について

前回（2004年3月）の役員選挙では、まず6名連記の郵便投票により12名の理事を選出し、最終的に会長推薦を加えて理事を24名に増やすという形式を取った（選挙のみでは必ずしも各分野からバランスのとれた理事選出が行なわれるとは言えないための措置）。今回も同じ形式を取って良いか否かについて討議された。理事の人数枠は予め決めておく必要があるのではないかという意見も出されたが、各分野からのバランスの取れた理事会構成のために、人数については若干の融通性をもたせておくべきではないかという指摘がなされた。

結論：今回の改選に際しては、前回の形式を踏襲することとし、1月中旬から下旬にかけて郵便投票により実施する。なお、開票は関東地区の代表理事に立ち会っていただき、事務局が担当する。

3. 学会誌について

論文審査について、前回と同じく理事に依頼する形式を取ることで良いかが諮られ、承認を得た。また審査の際、「中国語教育への特化」という要素を加味する必要があるかどうかという質問が出された。これについて、教育についてほとんど触れていない文法中心の内容であっても、教育の場で即活用出来るものであれば、査読後に可能な範囲で修正を要求すればよいのではないかという意見が出た。

結論：査読については、前回に従って関東地区常任理事に集っていただき、各理事に査読を依頼する手配を行なう。また査読の際に問題となる論文内容の基準については、文法中心の内容であっても、査読後に教育にもリンクするよう修正を求めれば良いこととする。なお、抜刷については、2005年3月の理事会時に承認された通り、希望者にのみ自己負担を原則として作成することとする。

4. 全国大会について

会長より、2005年度全国大会は2006年3月25日に大東文化大学にて開催予定であることが確認さ

れた。現在の予定では、アメリカのジョージタウン大学王清源教授の特別講演が予定されている。また、2004年度の理事会でも審議されたが、中国語教育に関してテーマを定めてパネルディスカッションを実施すべきかどうかという件について話し合わせ、開催校とも相談の上、実施できることが望ましいという意見が多く出された。

結論：大会時にパネルディスカッションを実施する方向で開催校と相談することとする。実施する場合には、高等学校・大学・民間の学校等を含む各分野の会員にパネラーとして参加してもらうのが理想的であるという意見が多数であった。

5. 夏期セミナー実施について

中国からの講師を迎えて行なう夏期セミナー（前回は2004年）を、2006年も実施すべきかどうかについて諮られた。2004年度は東京地区で2回、それぞれ4日間開催されたが、2006年に開催するとすれば、会場・開催期間をどうすべきかについて意見が交わされた。

結論：可能であれば、2006年度も開催するということで一致した。また会場について、今回は東京とそれ以外の1地区での開催が望ましく、東京地区での開催は1回にすべきであるということ意見が一致した。開催期間については、4日間連続で参加することの出来る会員は少ないように見受けられる為、一ヶ所3日間とするのが適当であるとする意見が多かった。

6. 理事からの意見について

(1) 学会名の英訳・中訳について

現在HPに掲載されている“The Japan Association of Chinese Language Education”、“日本汉语教学学会”の訳が適当かどうかについて、反対意見は出されなかった。次期大会時の会員総会に諮った上で承認を得ることとする。

(2) 会誌掲載論文要旨のHP掲載について

要旨のみを掲載することにどれほどの意義があるだろうかという意見も出されたが、やはり掲載しないよりは役に立つという意見もあり、大会時の理事会で改めて発議し、総会に諮ることとする。

(3) 桜美林大学シンポジウムについて

会長より、10月に桜美林大学にて開催されたシンポジウムの後援に本学会が名を連ねることとなった経緯が説明された。シンポジウムに関する報告が公にされれば、本学会の会員にも何らかの形でお知らせしたい。

(4) 例会での発表内容について

例会の発表テーマについては、教育に特化すべきであるという意見と、テーマは広くしてよいのではないかという意見があるが、どのような立場を取るべきかについて意見が交わされた。結果としては、教育学会であることを念頭においた上で、すべての研究発表のタイトルが教育に特化しているところまで要求することはないのではないかということ意見がほぼ一致した。

(5) 2005年度全国大会でのパネルディスカッション実施について

議題4(全国大会について)で述べたとおり、2005年度大会においてパネルディスカッションを実施する方向を開催校との間で検討する。

(6) 孔子学院について

立命館大学、桜美林大学での孔子学院設立をうけ、今後本学会もこれらの動向に注意を払い、得られた情報などは可能な限り会員へ知らせていく。

(2) 2005年度「例会」の記録(続)

<11月例会>

日時: 11月19日(土) 14時~

会場: 目白大学新宿キャンパス 10508 教室

人と題: 森山美紀子氏(東海大学)「動詞の辞書記述について」

竹中佐英子氏(目白大学)“学生的心理因素对汉语学习的影响分析”

<12月例会>

日時: 12月10日(土) 14時~

会場: 拓殖大学文京キャンパス国際教育会館 F 301 教室

人と題: 平山邦彦氏(拓殖大学)「中国語の間接疑問文に対する一考察」

戴 耀晶氏(お茶の水女子大学/復旦大学)“汉语否定句肯定句的对比分析”

立松昇一氏(拓殖大学)「中国語教育と教材開発—同時代を読む教材」

(3) 新規会員紹介その他

新規会員氏名(敬称略)

菊池 厚子 朱 紅 徐 雨葵 鈴木 ひろみ 須山 哲治 関 光世
中川 美保 森本 雄心 湯城 吉信 吉田 桂子 劉 郷英 盧 靚

住所不明会員(敬称略)

下記会員について住所・所属先等をご存知の方は事務局までご連絡くださいますようお願いいたします。

趙 慶 堯 李 春 呂 紅 梅

会費納入のお願い

会費未納の方は早急に納入くださいますようお願いいたします。

ホームページのお知らせ

「月例会」ご案内、各種お知らせ、記録などをご覧いただけます。「入会申込書」のプリントアウトも可能です。

アドレス: <http://www.jacle.org/> Google(日本語)で“中国語教育学会”で検索可。

(4) 「世界漢語大会」および「第八屆國際漢語教學討論會」 參加報告

古川裕 (大阪外国語大学)

0. はじめに

日本、中国ともに厳しい猛暑に襲われた 2005 年の夏、北京において第八屆國際漢語教學討論會が開催された。今回のこのシンポジウムは世界漢語大会 (World Chinese Conference) の系列活動の一つという位置づけで行なわれた。報告者はこの両會議に参加することができたので、ここに両會議の參加報告をさせていただく。(以下、特段の必要が無い限り日本漢字を使用する。)

1. 世界漢語大会 (<http://www.hyconference.edu.cn/>)

先ず、世界漢語大会は 2005 年 7 月 20 日 (水) から 22 日 (金) までの期間、北京飯店を主会場として開催された。大会初日 20 日午後の開幕式は人民大会堂の大講堂が会場となり、國務院の李長春、許嘉璐、唐家璇、陳至立氏らとの記念撮影などがアレンジされていた。会期は上述の三日間が充てられてはいたものの、最終日 22 日は午前中に閉幕式、昼食前後には早くも散会という慌ただしさで、実質的な會議は 21 日の午前・午後のみで丁度一日間という窮屈な日程であった。

北京飯店と人民大会堂という会場設定の仰々しさが示すように、この會議は中国教育部、とりわけ国家對外漢語教學領導小組 (国家漢办: <http://www.hanban.edu.cn>) が“漢語橋工程”の旗の下に對外漢語教學にかかる政策的な意気込みを国の内外にアピールするための一大デモンストレーションという趣が色濃い會議であった。主催者側の統計によると (注 1)、參加者総数は 623 名 (内、正式代表は 496 名) であり、その内、海外からは 65 か国合計 333 名の教育官吏、大学関係者、教育研究者が参加したとの由である。ちなみに日本からは、日本語教育振興協会、日本学生支援機構、國際交流基金などの機關代表や日本で最初の孔子學院を請け負うことになった立命館大学の学長ほか関係者、その他、数大学から中国語教育関係者が参加していた (注 2)。また在日本東京大使館、大阪領事館の教育参贊なども列席していた。中国国内からは、教育部を中心とする国家漢办的構成省庁のメンバーや各省市自治区の教育官吏、そして所謂重点大学の学長クラスの參加者が列席していた。

この大会を大きく貫くテーマは“世界多元文化架構下的漢語發展”とされ、その下にそれぞれ次のような主題を持つ三つの分科会が設けられていた。いずれの分科会も事前にアレンジされた報告者のスピーチがぎっしりと組まれており、その順番を消化するのに手一杯で、即興の発言や質疑応答は実質的に不可能であったように見受けられた。報告者は第 2 分科会・專題 2 の“HSK”分科会と第 3 分科会を駆け足で傍聴した。前者で【HSK (商務)】、【HSK (旅游)】、【HSK (文秘)】、【HSK (少儿)】などの HSK 系列試験や【HSK (北美版)】の開発進展状況が報告されたのが個人的には興味深かった。また、商務印書館から最新版の《現代漢語詞典 (第 5 版)》が参加者の手元に配布されたのも思いがけない収穫であった。

世界汉语大会：主題“世界多元文化架构下的汉语发展”。

第1分会：主題“多元文化交融和汉语需求”。

第2分会：主題“新时期汉语教学的运作机制”；

专题1“孔子学院的建设与发展”、专题2“汉语水平考试（HSK）的改革和发展”、

专题3“国外汉语教师培训规划”、专题4“教材创新与网络资源配置”。

第3分会：主題“国际第二语言教育发展前景”。

（注1）《世界漢語教学》2005年第3期所収の〈世界漢語大会紀要〉（国家漢办供稿）による。

（注2）参会者名簿に記載があるのは立命館大学の他に、関西大学、立正大学、早稲田大学、帝塚山大学、日本大学、大東文化大学、東京外国語大学、大阪外国語大学、金沢大学である（名簿記載順）。

2. 第八屆國際漢語教学討論會

1999年夏にハノーバー（ドイツ）で開かれた第六屆國際漢語教学討論會、そして2002年夏に上海で開かれた第七屆國際漢語教学討論會を経て、今回の國際漢語教学討論會は再び北京に戻ってきた。会期は上述の世界漢語大会閉会後の2005年7月23日から25日の三日間、会場は北京市郊外で西瓜の名産地として有名な大興区にある外語教学与研究出版社國際會議中心であった。

はじめに記したように、今回の國際漢語教学討論會は従来のように独立したシンポジウムではなく、世界漢語大会の系列活動の一環（注3）という位置づけであったため、幾つかの不都合が生じるはめになった。その最たるものは開催日程の確定に手間取ったことであろう。世界漢語大会の開催予定日程が（おそらく出席予定の国家首脳の前定変更によって）前後するたびに、こちら側の日程も自ずと前後せざるを得ず、我々の手元に届く通知毎に開催時期が異なっており、その結果、国内外の多くの参加者が出張や渡航の準備に困難を来したはずである。また、これに連動してプログラムにも影響が及び、プログラム記載済みの発表予定者や司会担当者が開会後も未到着あるいは無断欠席であったり、記載漏れの続発でプログラムを急遽組み直すなど泥縄を強いられた一面も見られた。これらのトラブルに徹夜で対処した開催者側の並々ならぬ誠意と苦労には頭が下がるばかりであるが、やはり残念なことではあった。かつて興水優先生が第七屆國際漢語教学討論會（上海）について報告された文章（本会報第2号、2002年9月）において「“官方”の参与」が目立ってきたと指摘されているが、その傾向は今回より一層鮮明で深刻な形で顕れてきたと言わざるを得ない。と同時に、このシンポジウムの主催者である世界漢語教学学会はそれらの動き、あるいは圧力に呑まれ込むのではなく、あくまでも教育・学術分野の国際的な民間組織団体としての存在理由を主張していることもここに併記しておきたい（注4）。

さて、主催者側のまとめによると、今回のシンポジウムには30数か国から450名余りの参加者があったという（注5）。これだけの参加報告者を実質二日間のプログラムの中に配分するわけであるから、上述の会議以上に窮屈なスケジュールが組まれるのは必定であり、今後シンポジウムの参加者数増加すなわち会議の肥大化によるマイナス面も懸念される場所である。

具体的には下のようなテーマに基づいて発表会場が分けられていた。参会者には各発表者が事前に提出した原稿を一冊にまとめた《論文摘要集》（商務印書館）が配布され、聴講の役に立った。

第八届国际汉语教学讨论会：主题“世界多元文化架构下的汉语发展”

第1分会：主题“汉语作为第二语言教学的学科建设和发展战略”。

第2分会：主题“汉语作为第二语言教学的教学法和教学模式研究”。

第3分会：主题“汉语作为第二语言教学的教材和教师队伍建设”。

第4分会：主题“现代教育技术在汉语作为第二语言教学中的运用”。

第5分会：主题“汉语作为第二语言教学的本体研究”。

第6分会：主题“汉语作为第二语言的习得及测试研究（一）”。

第7分会：主题“汉语作为第二语言的习得及测试研究（二）”。

第8分会：自由论坛

今回のシンポジウムは会場に出版社の国際会議施設を利用したことに象徴されるように、会議場内に出版社用展示ブースが多数用意され、多くの対外漢語教育関係の出版社が書籍類を展示販売し、情報交換の場としても多いに機能していた。中国では近年この分野の教材が急速にバラエティを増している中で、とりわけCD-ROMやインターネット、Eラーニングなど電子媒体による新しいスタイルの教材が連続と開発されていることに目をみはる思いがした。その他、こちらの会議でも商務印書館から《現代漢語詞典（第5版）》が配られたほかに、会場提供の外研社からも《現代漢語規範詞典》が提供され、中型辞書の熾烈なシェア争いを垣間見る思いがした。また、対外漢語教学分野の新しい定期行物として登場した北京大学対外漢語教育学院編の《漢語教学学刊》（北京大学出版社）と上海師範大学対外漢語学院編の《対外漢語教学研究》（商務印書館）も、それぞれ会場で創刊号を入手することができた。

さて、次回開催の第九届国際漢語教学討論会は3年後で2008年夏に当たる。同時期の北京はオリンピックに湧き混雑混乱が予想されるということで、シンポジウムは再び北京を離れ、中国国内のいずれかの地で開かれる予定である。

（注3）世界漢語大会の系列活動は、第八届国際漢語教学討論会の他に海外漢学学術研究会、世界漢語教学展覧、第四届“漢語橋”世界大学生中文比賽、国際大・中学生暑期漢語班和夏令營活動、中華文明巡礼など。

（注4）世界漢語教学学会についてはホームページ（<http://www.shihan.edu.cn/chn/index.asp>）を参照されたい。入会申込書も同学会ホームページからダウンロード可能である。今回シンポジウムの会期中に開かれた会員大会での選挙によって、陸儉明・北京大学教授が会長に再任され、袁博平（イギリス）、柯彼德（ドイツ）、白樂桑（フランス）、孟柱億（韓国）、姚道中（アメリカ）、古川裕（日本）、馬箭飛（中国）、趙金銘（中国）の8名が副会長に選出された。また、日本選出の理事は、奥田寛、陳文芷、高橋弥守彦、古川裕、郭春貴、樫山健介、西川和男、相原茂、興水優の9名である（以上、敬称略）。

（注5）《世界漢語教学》2005年第3期所収の〈第八届国際漢語教学討論会紀要〉（大会秘書処供稿）による。なお、日本からの参加者はプログラムに記載のある方の総数でわずか13名と前数回の参加者に比べて非常に少なかった。

（2005年11月20日）

(5)「2005年高等学校中国語教育全国大会」について

高等学校中国語教育研究会
前代表理事 篠田 俊彦

6月18日(土)19日(日)の両日に亘り、「コミュニケーション能力の向上」を共通テーマとして、第23回大会が、札幌市エルプラザを会場として開催された。高等学校教員等中国語教育関係者約80名、来賓その他11名の参加を得て、公開授業、履修単位別分科会、北海道における高等学校の中国語教育の現状の報告等、熱心に討議が行われた。

来賓として、大会の後援をいただいている文部科学省初等中等教育局国際理解専門官から高等学校における外国語教育の現状について、また、中華人民共和国駐日本大使館教育処一等書記官から中国政府と日本の高等学校の中国語教育の関わりなど、それぞれのお立場でのご紹介を兼ねたご挨拶をいただいた。また、基調講演として、北海道教育庁指導主事からは、北海道内の高等学校中国語教育の現状についてもご紹介をいただいた。これだけのご来賓のご挨拶をいただくようになったのは、ここ数年のことである。文部科学省の後援は3年前からいただいているが、今回初めてご挨拶をいただいた。中国大使館からも、数年来ご協力をいただいております、地元領事館を通じてのご協力も欠かせないものとなっている。いまや、単なる高校教員の集まりではなく、国内外にも認知された組織となってきたとともに、その活動も認知されてきている。

公開授業は、土曜日の休日にも拘わらず、札幌国際情報高校の生徒約30名が参加してくれて、T.T.(TEAM TEACHING)の実践授業を参観した。その後、履修単位数及び授業形態で3つの分科会に分かれて、公開授業についての討議及び日頃の授業の問題点などについて討議した。毎年のことではあるが、分科会の時間は幾らあっても足りないほど、参加者全員が問題点を持ち解決しようとしているため、熱心な討議となった。また、先進校の教員或いは経験の多い教員から貴重な助言もあった。中には、専門的な立場で大学や専門学校の先生方の助言もいただけた。研究会ならではの活動といえる。

また今年も、昨年度に引き続き、中国での日本語教育を実施している高校の生徒4名及び教員7名を黒龍江省から招請した。一日目は日本人生徒と交流を行い、二日目は中国人教師からテーマに沿って実践報告があり、それに対する討議も行われた。日本人、中国人それぞれから多様な質問及び自己の実践例の披露などもあり、それぞれの他言語教育の現状の理解ができた。こうしたことは研究会単独では実施できることではなく、財団法人三菱銀行国際財団の助成を得て実施できた。この催しは、一昨年に計画されたが、「非典」の影響で実施できず、昨年度やっと実現して、今年で3回目となった。

現在の当研究会の活動は、日常の教育活動について地域ごとに研修・討議等ができるような支部活動が基本となっている。支部活動が今のように全支部で実施できるようになってきたのは、ほんのここ数年のことである。この支部活動では実施しきれない、上記のような活動を行おうとするものが、この全国大会である。なお、来年度は同時期に関西で開催する予定である。

(本稿は早くにお寄せいただきながら、掲載が今日になってしまいました。篠田俊彦氏に心よりお詫び申し上げます。また、本大会については「中国語教育学会会報15」にも松山美彦氏による速報があります。併せてご参照願います。 — 中国語教育学会会長 依藤醇 —)